

# Daji 妲己 and Fox : The Formation Process of the Image and Legend in Feng-shen yan-yi 封神演義

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/790">http://hdl.handle.net/2297/790</a>

# 姐 己 と 狐

—『封神演義』に見る、イメージ及び物語の成立に至る一過程—

中 塚 亮

第零章；【序】

第壹章；九尾狐像の変遷

- ・ 1 - 1 ; 珍獣
- ・ 1 - 2 ; 瑞獣・瑞祥 1 <実在>
- ・ 1 - 3 ; 瑞獣 2 <神話的>
- ・ 1 - 4 ; 天狐

第貳章；狐媚・狐魅

- ・ 2 - 1 ; 悪符 1 <国乱>
- ・ 2 - 2 ; 悪符 2 <狐魅と女性>
- ・ 2 - 3 ; 蠱惑  
; 「狐媚」 ①淫蕩・艶魅  
; 「狐媚」 ②狡知・蠱惑

第参章；“姐己《表》” ～事実としての姐己～

第肆章；“姐己《裏》” ～狐姐己～

- ・ 4 - 1 ; 姐己九尾狐化
- ・ 4 - 2 ; 『武王伐紂平話』『列国史伝』『封神演義』における姐己

第伍章；もうひとりの姐己～雉鶏精姐己～

- ・ 5 - 1 ; 雉鶏精
- ・ 5 - 2 ; 雉鶏精姐己

第陸章；【結】小説の成立～如何にして物語は創りゆかれるのか～

## 第零章；【序】

私は昔から妖怪や仙人、魔術といった神秘的な諸物に心惹かれていた。中国文学を志したのも、一つには西洋の魔女や怪物、神話譚と比べて東洋、中国のそれは余り紹介されてこなかったことがある。

そう言う意味で言えば、『封神演義』は奇譚の宝庫である。徹頭徹尾荒唐無稽な怪力乱神の大暴れで紡がれている。中でも私が興味を持ったのは、妲己の身体を乗っ取り、殷王朝の滅亡を演出する九尾狐であった。

江戸時代の絵師鳥山石燕の『今昔画図続百鬼』玉藻前の項には「瑯邪代酔に古今事物項を引て云、『商の妲己は狐の精なり』と云々。その精本朝にわたりて玉藻前となり、帝王のおそばをけがせしとなん」とある。稲田篤信氏がそれに註して言うには、「金毛九尾の狐が天竺では班足太子の塚の神、中国では周の幽王寵愛の褒姒、または殷の紂王寵愛の妲己、日本に渡って鳥羽帝の愛妾玉藻の前に化けて、三国にまたがって国王を悩ます」と。（\*0）

何と本朝では九尾狐は三国を跳梁した大妖怪へと変化し、その始まりが妲己とされているのである。これはつまり妲己＝九尾狐、という設定が、それだけ人々の興味を引きつける魅力的な発想だったということの意味する。ならば、何故そのような設定が生まれ出でたのだろうか、という疑問が生まれた。

具体的に言おう。妲己＝九尾狐、というイメージは寵妃・妲己のイメージと妖狐・九尾狐のイメージの重なりによって生まれた。イメージは全て意識的に、無意識的に形成され、転変していく。その変遷の過程を辿ることで妲己＝九尾狐というイメージの形成を、ひいては如何にしてイメージは、そして物語は形作られていくのかを探る、というのが本稿の目的である。

## 第壹章；九尾狐像の変遷

『封神演義』における妲己は紂王を蠱惑し、非道な行いを導いている。それは、その正体が千年狐狸九尾であることと無関係ではない。九尾狐であることが彼女の艶魅さ、狡知さを説明しているのである。つまり、狐、とりわけ九尾狐には蠱惑、狡知、といったイメージが前提として存在していた。

まず、そのようなイメージがどのように形成されたのか見てみる。

1-1 ; 珍獣

又東三百里、曰青丘之山。……有獸焉、其状如狐而九尾、其音如嬰兒、能食人。食者不蠱。

(また、東に三百里、青丘の山と言う。……獣がいる。その姿は狐のようで、尾が九本。鳴き声は赤子のようで、よく人を食べる。これを食べた者は邪気にあたらない)

<山海經・南山經次一經>

ここに見える九尾狐像は神秘的な、あるいは妖異を為すような超自然的なそれではなく、食べることによる薬効が記されるなど、その存在が現実味をもって語られるような珍獣としてのそれである。

1-2 ; 瑞獣・瑞祥 1 <実在>

それが、時が下ると、卑近な現実性から引き上げられて、一種の神聖さを帯びてくる。

(高祖太和) 十年三月、冀州獲九尾狐以獻。王者六合一統則見。周文王時、東夷歸之。曰、王者不傾於色則至德至、鳥獸亦至。

(高祖太和十年三月、冀州で九尾狐が獲えられ、獻じられた。王者が天下を統一すれば現れる。周文王の時、東夷が周に服属した。言う、王者が色に傾かなければ至徳となり、鳥や獣もまた現れるのである)

<魏書・靈徵志下>

(承光六年) 八月……甲子、鄭州獻九尾狐、皮肉銷尽、骨体猶具。帝曰…「瑞応之来、必昭有徳。若使五品時序、四海和平、家識孝慈、乃能致此」

(承光六年八月……甲子、鄭州が九尾狐を献上した。皮や肉はなくなっていたが、骨格はまだ残っていた。帝が言った…「瑞応が来るのは、

必ずや有徳のあらわれである。家庭内の五つの秩序が守られ、四海が平和で、家識が孝慈ならば、現れるのである)」

＜北史・周本紀下第十＞

このように、この例では九尾狐は『山海経』におけるようなただの珍獣ではなく、天子の徳が高かったり、社会が正しく治まっている時に現れる瑞獣へと変貌している。しかし、獲えられて献上されることからわかるように実在の動物として認識されていることも確かだ。

### 1－3；瑞獣2＜神話的＞

瑞獣としての九尾狐の典型例は、禹が白狐九尾を娶ったという話である。

恐時之暮失其度制、乃辞云吾娶也必有応矣。乃有白狐九尾造於禹。禹曰白者吾之服也、其九尾者王之證也。……禹因娶塗山。

（禹は結婚の時間が遅れて後嗣がないことを恐れていた。禹は言った。私が娶るべき者には然るべき瑞応があるはずだ、と。そして白狐九尾に出会った。禹は言った。白は私の服、九尾は王の證だ。……よって、禹は塗山の娘（白狐九尾）を娶った）

＜吳越春秋・越王無余外伝第六＞

ここで九尾は“王之證”とされている。これは“九”が窮数であるとともに、次に挙げる『白虎通徳論』に見えるように、子孫繁栄、ひいては王朝の将来的繁栄を意味するからであろう。

狐九尾何。……必九尾者也。九妃得其所子孫繁栄也。於尾者何。明後当盛也。

（狐九尾とは何か。……九尾とは九妃が得る所の、子孫の繁栄である。尾とは何か。将来盛んになることである）

＜白虎通徳論・卷第五・封禪＞

また、禹が娶った九尾狐は白狐である。白狐もまた、瑞祥とされる。(＊1) 白狐九尾ともなれば瑞祥に瑞祥を重ねたようなめでたい存在となろう。

この九尾狐は前述した『北史』『魏書』の二例とは異なって実在の動物と言うより、禹と相応するような神話的存在である。つまり瑞獣九尾狐にも二つの種別があり、後者のような架空の存在としての九尾狐というものも認識されていた、と言える。

#### 1-4 ; 天狐

架空存在の九尾狐は瑞獣に限らない。

道術中有天狐別行法。言天狐九尾。金色。役於日月宮。有符有醮日。可以洞達陰陽。

(道術中に天狐別行法有り。言う、天狐は九尾、金色。日月の宮に仕える。符有り、日を祀る有り。以て陰陽を洞達することが出来る)

<酉陽雜俎> (『太平広記』 卷四五四・劉元鼎)

この九尾狐は同じく架空性を強く持ち、現実を越えているが、瑞獣という意味合いは欠けている。また、禹の妻たる白毛九尾との相違としてその色が挙げられる。(＊2)

同じく『太平広記』からもう二例ほど見てみよう。

狐五十歳。能變化為婦人。百歳為美女。為神巫。或為丈夫與女人交接。能知千里外事。善蠱魅。使人迷惑失智。千歳即與天通。為天狐。

(狐は五十歳で変化して婦人になれる。百歳で美女、神巫になり、あるいは丈夫となって女人と交接する。よく千里の外の事を知る。よく蠱魅し、人を迷惑失智させる。千歳で天と通じて天狐となる)

<玄中記> (『太平広記』 卷四四七・説狐)

唐太宗以美人賜趙国長孫無忌。有殊寵。忽遇狐媚。其狐自称王八。身

長八尺余。恒在美人所。美人見無忌。輒持長刀斫刺。……宅内井竈門廁十二辰等數十輩。或長或短。状貌奇怪。悉至庭下。崔呵曰。諸君等為貴官家神。職任不小。何故令媚狐入宅。神等前白云。是天狐。力不能制。

(唐の太宗は美人を趙国長孫無忌に賜った。殊更に寵愛していたが、狐媚に遭った。その狐は王八と自称し、身長八尺余、いつも美人の所にいた。美人は無忌を見るとたちまち長刀を持って襲いかかった。……宅内の井戸、竈、門、廁、十二辰等の神数十輩。あるいは大きく、あるいは小さい。容貌奇怪。ことごとく庭下に至る。崔が叱って言った。諸君等は貴官の家神であり、任務は小さくない。何故媚狐を宅に入れさせたのか。神等は言った。これは天狐で、その力は大きく制することが出来ません)

<広異記> (『太平広記』 卷四四七・長孫無忌)

『玄中記』の狐像は、知識に秀でると共に、人に化けることが出来る。また、蠱魅に長け、人間を惑わせる、という性質を持つ。それが千歳に達すると天に通じて天狐となる、というのだから更なる妖力を獲得するのであろう。その様子が『広異記』に描かれている。天狐は井戸や竈、門、廁、十二辰程度の神ではかなわないほどの神通力を奮っており、五岳の神をしてようやくとおさえることが出来るのである。

「強大な神通力を持ち、人を蠱魅、惑わせる千歳金毛九尾たる天狐」

無論、同じ本に集められていたからと言って、天狐が、このような諸書の条件を貼り合せた姿で認識されていたとは思えない。しかし、天狐を軸に、九尾—金色—蠱魅—強大な神通力、が結びついたのもまた事実である。少なくともそれらの条件が天狐＝“最高の妖狐”というものを想定したときにまず浮かび上がる条件であったと言うことは出来よう。つまり、九尾・金色・蠱魅・強大な神通力、というものが一つの妖狐のイメージとして、人々に意識されていたのである。

### 第弐章；狐媚・狐魅

狐媚・狐魅という言葉はいくつかの意味と、イメージを内含している。そのイメージが、「狐」のイメージを、ひいては妲己と狐との接点を浮かび上がらせるのである。

#### 2-1；悪符1<国乱>

白狐・九尾狐が瑞祥とされることは前に述べた。反面、狐・狐妖は悪符と見られることもあった。

中大同中、毎夜狐鳴闕下、数年乃止。京房易飛侯曰…「野獸群鳴、邑中且空虚」俄而国乱、丹陽死喪略盡。

(中大同中、毎夜宮門の下で狐が鳴くことがあり、数年して止んだ。京房易飛侯は言った。…「野獸が群れなして鳴けば、邑中は空虚になる」俄に国は乱れ、丹陽は死者が溢れ尽く略奪された)

陳禎明初、狐入牀下、捕之不獲。京房易飛侯曰…「狐入君室、室不居」未幾而国滅。

(陳、禎明の初め、狐がベッドの下に入り、獲らせることが出来なかった。京房易飛侯は言った。…「狐が君主の部屋に入れば、部屋には居れなくなる」未だ幾ばくもしないうちに国は滅んだ)

ともに、<隋書・五行上・毛蟲之孽>

狐鳴は国の混乱を予兆し、狐が君の室に入れば、国が滅ぶ前兆。

“王者不傾於色則至徳至、鳥獸亦至”とは、前掲した『魏書』「靈徴志下」の一節だが、為政者が徳を修めればそれを感じて瑞獣が姿を見せるように、為政者の徳が薄ければ普段は君徳におさえられて現れ得ない悪符・妖獣も跳梁するようになる、ということだろうか。

いずれにしても狐が国乱の象徴であることには違いない。

2-2 ; 悪符 2 <狐魅と女性>

高祖太和元年五月辛亥、有狐魅截人髮。時文明太后臨朝、行多不正之徵也。

(高祖太和元年五月辛亥、狐魅が人髪を切る事件があった。時に文明太后が政治に臨み、行いに不正が多かった徴である)

肅宗熙平二年、自春、京師有狐魅截人髮、人相驚恐。六月壬申、靈太后召諸截髮者、使崇訓衛尉劉騰鞭之於千秋門外、事同太和也。

(肅宗熙平二年、春より、京師で狐魅が人髪を切る事件があり、人々は互いに驚恐した。六月壬申、靈太后は諸々の髪を切る者を召し、崇訓衛尉の劉騰に千秋門外で鞭打たせた。事は太和と同じである)

ともに、<魏書・靈徵志下>

この髪切り狐魅の出現は女性が朝に臨み、不正が多かった徴だという。また、熙平二年の狐魅譚については、『洛陽伽藍記』にも記載がある。

有輓歌孫巖。娶妻三年、不脱衣而臥。巖因怪之、伺其睡、陰解其衣、有毛長三尺、似野狐尾。巖懼而出之。妻臨去將刀截巖髮而走。隣人逐之、變成一狐。追之不得。其後京邑被截髮者一百三十余人。初變婦人衣服珉妝。行路人見而悦近之、皆被截髮。當時有婦人着綵衣者、人皆指為狐魅。熙平二年四月有此至秋乃止。

(輓歌歌いの孫巖という者がいた。娶って三年、妻は服を脱がずに寝た。巖はこれを怪しんで、その眠ったのを伺って、密かにその服を解くと、毛の長さ三尺、野狐の尾に似たものがあった。巖は懼れてこれを追い出した。妻は去るに及んで刀で巖の髪を切って逃げた。隣人が追うと、一匹の狐に変わり、追いつけなかった。その後京邑で髪を切られる者一百三十余人。初め美しく着飾った婦人に化け、道行く人がこれを見て悦んで近づくと、皆髪を切られた。当時、綵衣を着た婦人は、人、皆これを指さして狐魅と呼んだ。熙平二年四月にこの出来事があり、秋に至っ

て止んだ)

< 卷第四・城西・法雲寺 >

「綵衣を身につけた婦人たちこそいい迷惑であった。尻尾のいかんを問わず、「狐魅」の称を賜ったからである。……その果てに「狐魅」なる語は美貌の婦人を指す隠語の如く使われたかもしれない。……綵衣をまとった婦人は不特定の複数の人物であろうが、そうした婦人が「狐魅」の称をもって狐と関連づけて呼称された事実こそ何よりも注意されてよいものである」(\*3堀誠「狐変姐己考補」)

女性が朝政に臨み、不正が多いと現れる狐魅。国がうまく治まっていない状況の証としての狐、というイメージは2-1で挙げたような国乱の予兆にも相通じるものがあるが、ここで注目すべきはやはり、あえて「女性が」と指定していることであろう。「狐魅」と「女性」には特別のつながりがあるのではないだろうか。

それを更に進めるのが『洛陽伽藍記』である。

堀氏が指摘するように「女性」に化けた「狐魅」を呼ばれるための呼称が、転じて「女性」そのものを指して使われた、という可能性は十分に考えられる。ここでは「狐魅」と「女性」との混淆すら始まっている。

「女性」と「狐魅」のつながりについてもう一つ見てみよう。

### 2-3 ; 蠱惑

『玄中記』で、百歳を経た妖狐は「善く蠱魅」し、「人をして迷惑失智せしめる」と言われている。狐が人間に化けて異性を魅了、惑わせる話は枚挙に暇がない。それ故にか、「狐媚」ひとことで“谓以阴柔手段迷惑人”を意味する程である。(\*4)

『封神演義』においても、

聴姐己之狐媚、造炮烙之刑、壞上大夫梅伯。(第二七回)

(紂王は妲己の狐媚を聴き、炮烙の刑を造り、上大夫梅伯を殺した)

という表現で妲己が紂王を蠱惑するさまを言い表している。

この「狐媚」ということばについて、そのイメージを二つの角度から見てみる。

### ①淫蕩・艶魅

そもそも狐が淫蕩であるという考えの誕生は古い。『詩経』において“雄狐”は淫蕩な男、女を誘う男に喩えられている。(\*5) 無論、男に限るものではない。『搜神記』卷十八「山魅阿紫」では、『名山記』曰、として、

狐者、先古之淫婦也。其名曰‘阿紫’、化而為狐。

(狐は千古の淫婦である。その名を‘阿紫’と言う。化けて狐となる)

という文を挙げている。そもそも狐の正体自体が淫婦が化けたものだといふのである。ここでは正体と変化後の順序が逆になっているが狐と女性の関係が深い、ということは十分に証明できよう。後には狐は必ず女性に化けるといふ説も出てくる。

狐千歳始與天通不為魅矣。其魅人者多取人精氣、以成内丹。然則其不魅婦人何也。曰 狐陰類也。得陽乃成。故雖牡狐必托之女以惑男子也。

(狐千歳にて初めて天と通じて魅をなさない。その、人を魅するのは多く人の精氣を取り、以て内丹を成すためである。ならばその、婦人を魅さないのは何故か。言う、狐は陰類であるから、陽を得て成る。故に牡狐といえども必ず女形を取って、男子を惑わすのである)

〈五雜組・卷九・物部一〉

もっとも、ここに書かれたように必ず女性に化けて男性を惑わすとは限らず、男性に化けて女性をたぶらかすといった例も見受けられるのだが(\*6)、

狐の淫性は女性性とより深く呼応していることはうかがえる。

## ②狡知・蠱惑

妲己は①に見るような淫なる魅力を持って紂王を籠絡した。無論彼女はただの美貌だけでなく、魅力で絡め取った相手を操るための、類い希なる非道な知謀・狡知さも兼ね備えていたことだろう。前述した“聽妲己之狐媚”とは妲己の、魅力を背景とした残虐な進言を採用して、の意である。

「狐媚」とは髪切り狐の「狐魅」と同様、狐の妖怪といった意味である。それが、「蠱惑」の意味をも表すのは何故か。

おそらくはその生態を観察した結果であろう、狐は元々慎重な疑い深い動物だととらえられていた。『楚辞』「離騷」では“心猶豫而狐疑兮”（心は猶ためらい疑いつつ）“日勉遠逝而無狐疑兮”（ためらわずはやく遠くへ行きなさい）“心猶豫而狐疑”（心は猶ためらい迷い）と三度も「狐疑」ということばで、ためらい迷うさまを言い為している。

慎重な疑い深さは知的さを、そしてずるがしこさも思わせる。その良い例が、「虎の威を借る狐」（『戦国策』楚卷第五）であろう。また、『春秋左氏伝』の、約束を結びながら、それを反故にする晋侯をして、狐に喩えるのも同じ発想だろう。

対曰乃大吉也。三敗必獲晋君。其卦遇蠱。曰千乘三去。三去之余、獲其雄狐。夫狐蠱。必其君也。

（答えて言った、乃ち大吉である、と。三度敗北せしめて必ず晋君を捕らえる。その卦は“蠱”でそのことばは千乗三度去り三度去りし後その雄狐を獲る、である。“狐”は“蠱”するものだからきっと晋君を意味するのである）

＜春秋左氏伝・僖公十五年＞

この時点で狐と蠱惑は結びついている。狡知な狐、そしてその狡知さを「蠱」と言い為した。人に化けた妖狐を呼ばわった「狐魅」ということばが、

妖狐が化けたような婦人を言い表すことばに変容したように、「狐媚」ということばが、「狐媚」＝狐妖が為すような狡知・蠱惑さを表すことばになったとしても何ら不思議はない。

終不能如曹孟徳、司馬仲達父子、欺他孤兒寡婦、狐媚以取天下也。

(大丈夫という者は、曹孟徳や司馬仲達父子のように、孤兒や寡婦を欺き、狐媚を以て 天下を取ることは出来ない)

<晋書・卷一〇五・石勒戴記>

権力の篡奪者や、不義不忠の輩が得てして「狐媚」呼ばわりされるようであるが、中でも典型的な例が則天武后である。

偽臨朝武氏者、性非和順、地実寒微。……入門見嫉、蛾眉不肯讓人；掩袖工讒、狐媚偏能惑主。……加以虺蜴為心、豺狼成性。近狎邪僻、殘害忠良、殺姊屠兄、弑君鳩母。

(偽りて朝政に臨む武氏は、性は和順に非ず、家柄は貧しく賤しい。……門を入れば嫉を表し、蛾眉は人に譲ろうとしない；袖を掩い、讒言を為し、狐媚でかえって主君を惑わせる。……加えて心はマムシやトカゲの如くに冷たく、ヤマイヌや狼のように殘虐な性格をしている。佞臣と慣れ親しみ、忠義で善良な者を虐げる。その上、姉を殺し兄を屠り、主君を弑逆し母を毒殺する)

<駱賓王『為徐敬業討武(明/空)檄』>

これこそ「狐媚」の中の「狐媚」。姐己に相通じる悪妃の典型と言えよう。白居易もまた、「狐媚」について述べている。

古塚狐、妖且老、化為婦人顔色好。……忽然一笑千万態、見者十人八九人迷。仮色迷人猶若是、真色迷人応過此。……狐仮女妖害猶淺、一朝一夕迷人眼。女為狐媚害即深、日長月長溺人心。何況褒姐之色善蠱惑、

能喪人家覆人国。

(古塚狐、妖にして且つ老。美しい婦人に化ける……忽然と一笑すれば千万のさま、見る者十人に八九人は迷う。仮の色の人を迷わすも猶かくのごとし、真の色の人を迷わすことまさにこれを過ぎる。……狐が女形を借りるも害、猶浅し、一朝一夕人眼を迷わすのみ。女が狐媚を為すは害、即ち深し、日に長じ月に長じ人心を溺れさしむ。どうして褒姒の色がよく蠱惑して、人が家を失い、国を覆さないことが出来るだろう)

<古塚狐>

所詮狐の化けた女性は、「仮の色」であり、「真の色」である本当の美人にはかなわない。「仮の色」はほんの一時人の眼を迷わせるが、「真の色」は家を滅ぼし、国をも覆す。文字通り傾国の美女、なのである。

ここにおいて女性の為す「狐媚」は曹孟徳や司馬仲達のそれとは違うニュアンスを含んでいる。もっと艶魅な響き、①に見るような淫なる魅力以て主君を、あるいは男性を陥れていくような妖しさがある。

男の「狐媚」が『戦国策』に見るような狐のずる賢さだとすれば、女の「狐媚」は狐の淫蕩さを受け継いでいる。だから、同じように甘言で取り入り、籠絡し、ともに「狐媚」と呼ばれてもそこには明確な違いが存する。

「狐媚」は一つではない。

「女性」にとっての「狐媚」とは「色」である。

その「真の色」。——真の「狐媚」をなす者の代表こそが周の褒姒、そして殷の妲己なのである。(＊7)

### 第参章 “妲己《表》” ～事実としての妲己～

このように「狐媚」の代名詞として挙げられるほど名の通った寵妃・妲己であるが、史書などからはあまり具体的な姿は浮かんでこない。

殷辛伐有蘇。有蘇氏以妲己女焉。妲己有寵於是乎與膠鬲比而亡殷。

(殷辛、有蘇氏を伐つ。有蘇氏妲己を娶せる。妲己寵有ること、膠鬲

と比す。殷亡ぶ)

<国語・晋語第七>

昔人君之蔽者夏桀殷紂是也。……紂蔽於妲己飛廉而不知微子啓以惑其心而乱其行。

(昔の昏君と言えば夏桀・殷紂である。……紂は妲己・飛廉に耳目を蔽われ、微子啓を知らず、心を惑わせ、行いを乱した)

<荀子・卷第十五・解蔽篇第二十一>

帝紂……愛妲己、妲己之言是從。

(帝紂……妲己を愛し、妲己の言に従った) <史記・殷本紀第三>

以上からわかるのは紂が妲己を寵愛し、それによって滅んだ、ということだけであり、妲己の主体的な行動は全くうかがい知れない。妲己の存在はあくまでも紂王の昏君ぶりを表現するための材料としてである。

『列女伝』に至っていくらか妲己のキャラクターがうかがえるようになる。

妲己者殷紂之妃也。嬖幸於紂。紂……不離妲己。妲己之所誉貴之。妲己之所憎誅之。……流酒為池。懸肉為林。使人裸形相逐。其間為長夜之飲。妲己好之。百姓怨望。諸侯有畔者。紂乃為炮烙之法。膏銅柱加之炭。令有罪者行其上輒墮炭中。妲己乃笑。……妲己曰「吾聞聖人之心有七竅」於是剖心而觀之。

(妲己は殷紂の妃なり。紂に寵愛される。紂……妲己を離さず。妲己の誉める所を貴と為し、妲己の憎む所を誅罰した。……酒を流して池と為し、肉を懸けて林と為した。人を裸にして相い逐わせ、その間長夜の飲を為した。妲己はこれを好み、百姓は怨望し、諸侯には反する者がいた。紂はそこで炮烙の法を造った。銅柱に油を塗り、これに炭を加える。有罪者にその上を歩かせ、いつも炭中に墮ち、妲己はそれを見て笑った。……妲己は言った「私は聖人の心臓には七つの穴があると聞きました」

そこで心臓を裂いてこれを見た)

<列女伝・殷紂妲己>

『封神演義』に見られる悪行の多くがここに現れる。しかし、殷周革命からはるかに時が下った前漢末に至って初めてこのような所行が明らかになるのは不自然である。

「殷紂に関する一連の説話は、征服王朝である周が、被征服王朝である殷の滅亡の必然性を説く論理を中核とし、「更に後代に至って易姓革命の論理として収斂されてゆく」

との、田村和親氏の指摘がその回答となろう。(＊8)

妲己は紂王の昏君さを引き立てるために、その性格が、非道さが付与された。これによって寵妃の代名詞として称せられる稀代の妖婦へと昇華したのである。

第肆章；“妲己《裏》”～狐妲己～

4－1；妲己九尾狐化

堀誠氏の「狐変妲己考」によると、現時点で確認される妲己、九尾狐説の最古の記述は平安時代末(1102-07＊9)の著作、大江匡房『狐媚記』の、

狐媚変異。多載史籍。殷之妲己為九尾狐。

(狐媚の変異、多く史籍に載る。殷の妲己、九尾狐と為す)

というものであるという。(＊10)

堀氏も指摘されているが、この「狐媚変異。多載史籍」という記述からして、日本において、大江匡房が勝手に創造した説とは考えられない。中国において、これまで述べてきたような種々の要因が混ざり合った結果誕生し、何らかの漢籍に紹介されたものと考えられる。それでは変化の過程を順に述

べていこう。

①史実の妲己；もちろん、最初に存在していたのは歴史的な実在人物としての妲己だ。この人物が実際どういう人物だったのかは今となっては知りようがない。殷王朝最後の王紂の寵妃であった、という程度が最低限確実と目される情報か。

②稀代の悪妃妲己；それが、紂王を非道の昏君たらしめ、殷周革命をより正当化する、という後世の改作の中で、稀代の悪妃というイメージを獲得する。

③真の狐媚妲己；妖狐＝「狐媚」が為すような蠱惑の術そのものを、転じて「狐媚」と呼ばれるようになる。稀代の寵妃妲己は色の中の色とみなされていた。その妲己と狐媚が結びつき、妲己は狐媚の中の狐媚を為す者となった。

④九尾狐と形容される妲己；③と同様の変化がここでもう一つ見られる。次の文章を見て欲しい。

陳彭年被章聖深遇……時人目為九尾狐、言其才可謂国祥而媚惑多岐也。

（陳彭年は章聖に深く遇された……時の人は九尾狐と見なし、その才能は国のさいわいと謂うに値するが、媚惑して混乱させる、と言った）

<儒林公議>

「狐媚」が「妖狐」という具体的な事物から、「狐媚」が為すような「蠱惑」という抽象概念へと広がったように、また、「狐魅」が、「狐魅」が化けた人間を指す呼称から、「狐魅」が化けるような「人間」を指すことばへと広がったように、「九尾狐」もまた「妖狐」から「九尾狐」が為すような「蠱惑」に、そしてその「蠱惑」を為す「人間」を指す呼称へと広がったのである。ここで使われる「九尾狐」は今の私たちが用いる「女ギツネ」（性別の異同はあるけれど）と同様、由来となった「妖狐」ではなく、一般化した、「人間」を表

現することばになっている。

かくして、九尾狐もまた、本来の妖狐としての形象から離れて蠱惑のシンボルへと変貌した。『儒林公議』は建隆から慶歴年間(960-1048)のことを記している。また、撰者の田況は1005-1063の人であるから、少なくとも1063年より以前には、「九尾狐」ということばは妖狐「九尾狐」そのものではなく、「蠱惑」する人間の意味でも使われていた、ということが出来る。

③で挙げたように、姐己は真の色——真の「狐媚」を為す者と目されていた。姐己を褒姒と並ぶ真色と称えた白居易は772-846の人だから、いつ頃「九尾狐」を抽象概念、あるいは人の呼称として用いるに至ったかは知らないが、割と早い時期から姐己と「狐媚」とは近接していたと見られる。恐らく、「九尾狐」なる語が後発の意を獲得する頃には姐己を蠱惑・「狐媚」に精通した者と見る見方は成立していたろう。ならば、それをより強める表現として「九尾狐」ということばで姐己を形容することがあっても決して不思議ではない。

\*\*\*\*\*

(図解)

・ a. 「狐媚」・ **狐媚** = 妖狐



・ **狐媚** = 狐媚が為すような蠱惑

・ b. 「狐魅」・ **狐魅** = 妖狐



・ **狐魅** = 妖狐が化けた人間(正体は妖狐)



・ **狐魅** = 妖狐が化けたような人間(正体は人間)

・ c. 「九尾狐」・ **九尾狐** = 妖狐



・ **九尾狐** = 九尾狐が為すような蠱惑(抽象概念)



・ **九尾狐** = 蠱惑を為す人間

\*\*\*\*\*

⑤九尾狐妲己；そして、抽象的概念を意味する「九尾狐」で称せられた妲己が、物語創作的な想像力によって、実際の妖狐「九尾狐」に転じたに違いない。妲己と妖狐のイメージは実に良く重なる。

その魅力と狡知さで国家を滅亡に追いやった妲己。一方、狐は蠱惑・狡知そのものを「狐媚」というほどであり、また「国乱の悪符」や「女性が政治で不正を為したときに現れる」といったイメージをも兼ね備えている。

妲己と九尾狐が結びつくのは、もはや一種の必然であったかもしれない。そして、それを記した漢籍が日本に渡り、大江匡房の筆に書き留められるのに至ったのである。

\*\*\*\*\*

(図解)

・①**史実の妲己**

↓ +文・武王と紂王の比較のため。

・②**残虐非道な妲己**

↓ +本来具体的概念を表していた「狐媚」の抽象概念化。「狐媚」

↓ による形容。

・③**「狐媚」を為す妲己**

| +本来具体的概念を表していた「九尾狐」の抽象概念化。「九尾狐」による形容。

・④**「九尾狐」と呼ばれる**

↓ +妖狐のイメージ（蠱惑・国乱・女性専横）と妲己のイメージの合致。物語創作的な発想による「九尾狐」化。「九尾狐」の本  
↓ 性への回帰。

・⑤**九尾狐妲己**

\*\*\*\*\*

4-2 ; 『武王伐紂平話』『列国史伝』『封神演義』における妲己

『封神演義』は『武王伐紂平話』・『列国史伝』をふまえた上に成立しており、(\*11) この三作の継承の間に描写は膨らみ、展開には工夫が凝らされて

いく。特に大きいのは史書や、事実たる事を意識した先行記述から、虚構へと踏み出した『平話』への変貌であるが、『史伝』から『封神』への変化もまた同等に大きい。それは物語全体を眺めれば見て取れる。

『平話』『史伝』においては妖異が介在しているとは言ってもあくまで主体は人間であり、歴史を脚色した小説という様態であるが、『封神』では、殷周革命は天数（運命）であるとし、物語の主体を天数の実現に参与する仙人におく。大軍師太公望にしてもその威厳は薄く、仙界の使い走りで見まがわんばかりである。そのため、はるかに物語のスケールは大きく、破天荒になっている。

その変化は妲己にも反映されている。

『平話』『史伝』では九尾狐が人間妲己の身体を奪い、紂王を惑乱する理由は特に述べられない。これは歴史上の悪妃妲己という意識を引きずっていたからではないだろうか。だから九尾狐妲己が紂王を蠱惑し、政治を紊乱させることにも理由はいらぬ。全ては実在した人間妲己が実際に行ったことであり、そして九尾狐妲己もまた、妲己なのだから。

しかし、客観的に既存の歴史知識を横に置いて考えると不自然さも残らないではない。九尾狐は何も殷を滅ぼす必要はない。むしろその狡知さを生かして権力を篡奪しでもした方がよほど有意義ではないか、などと考えてしまう。あえて理由づけるなら、九尾狐の本能・習性として、とでもなろうが、それでは余りにお粗末だ。

妲己は稀代の蠱惑の妖婦に作り上げられ、それにより「蠱惑」を意味する「狐媚」、「九尾狐」ということばもて形容されるようになり、それが転じて妖狐「九尾狐」となったのではないか、というのが先述した私の考えであるわけだが、『平話』『史伝』ではこの枠を越えていない。ただ、蠱惑をなす主体が九尾狐に変わっただけである。

『封神』ではそこに合点がいく理由を与えた。

(女媧) 娘娘曰…「三妖(筆者註；千年狐狸精・九頭雉鷄精・玉石琵琶精、の三妖) 聽吾密旨：成湯望氣暗然、当天下失；鳳鳴岐山、西周已

生聖主。天意已定、気数使然。你三妖可隱其妖形、托身宮院、惑乱君心；俟武王伐紂、以助成功、不可殘害衆生。事成之後、使你等亦成正果」

（女媧娘娘は言った…「三妖よ、私の密旨を聞きなさい：成湯の氣を望むと暗然としており、当に天下は失われようとしています；鳳凰が岐山に鳴き、西周には既に聖主が生まれ、天意は既に定まり、天数はこのようになっています。貴方達三妖は妖形を隠して、身を宮中に置いて、主君の心を惑乱させるのです；そして武王が紂を伐つのを待って、それを助けて功を成しなさい。ただし民衆を傷つけてはいけませんよ。事が成った後には、貴方達もまた悟りに至らせましょう）」

＜封神演義・第一回＞

ここでは妲己が紂王を蠱惑し、殷王朝を滅ぼすことは女媧娘娘から課せられた使命であり、天数の実現を成し遂げるための重要な任務なのである。（もともと、彼らは任務に張り切りすぎた故か、それとも妖怪の血が騒いだのか、“不可殘害衆生”の一節をすっかり忘れてしまって女媧娘娘にも見捨てられて処刑されてしまうのだけれど）

これによって妲己の行った蠱惑の所行の数々、殷滅亡へのプロセスは一本の必然の糸に貫かれることとなる。そしてそれは人間妲己にではなく、九尾狐妲己にこそ与えられて然るべき使命なのである。

ここに至って九尾狐妲己は人間妲己、事実の妲己を越えた。物語としての要求が事実の意味づけし、物語に取り込んだ。殷周革命は真に物語となり、妲己は真に九尾狐となった。

遂に妲己は完全なる九尾狐への変貌を遂げて見せたのである。

第五章；～もうひとりの妲己～

さて、妲己を巡る物語も終章に向かう。その前にもう一つ別の物語を見てもらおう。

『封神演義』に登場する寵妃は九尾狐妲己だけではない。他にも九頭雉鷄精が化けた胡喜媚と玉石琵琶精が化けた王貴人という二人の妖変の寵妃が存

在する。そして、その内、胡喜媚については、彼女もまた、妲己を由来としているという章培恒氏の次のような指摘がある。(＊12)

既然从元代以来，说书艺人已把妲己作为狐狸精，……妲己之为雉鸡精，一定也流传在民间、而且有相当影响的传说。《封神演义》的作者则从这两种传说中得到启发：一面把妲己写成狐狸精，一面将雉鸡精精衍化成第二个妲己——与姐妹相称、同受纣王宠爱、共同败坏纣王江山的喜媚。

(既に元代以来、説書芸人は妲己を狐狸精と見なしていた。……妲己を雉鶏精とする説はきっと民間に伝わり、相当の影響のある伝説であったろう。『封神演義』の作者はこの二種類の伝説から啓発された：妲己を狐狸精とする一方で雉鶏精を第二の妲己——姉妹と呼び合い、同じく紂王の寵愛を受け、紂王・殷王朝を滅ぼす喜媚、に創ったのである)

<章培恒『新整理本封神演義・前言』> (＊13)

妲己狐狸精説が元代には流布していたという説は興味深いが具体的な証拠を未見なのでここでは採用しない。以下では、胡喜媚を第二の妲己とする見方について述べる。

#### 5-1 ; 雉鶏精

なぜ九頭雉鶏精が妲己であるのかを論じる前に、雉、及び九頭がどのようなイメージを持っているのかを簡単に見てもらおう。

##### ①白雉は瑞祥

九尾狐・白狐と同様、白雉も瑞獣とされる。

九月、日南徼外蠻夷献白雉、白兔。

(九月、日南、国境外の蠻夷が白雉、白兔を献上した)

<後漢書・光武帝紀>

(漢熹平五年) 夏四月丁巳、饒安縣言白雉見。

(漢熹平五年夏四月丁巳、饒安縣で白雉が現れたと言う)

<魏書・文帝紀>

②雉は倫理に準じる・貞潔

士相見之禮、摯冬用雉。 [註] 士摯用雉者、取其耿介、交有時、別有倫也、雉必用死者、為其不可生服也。

(士が相見えるの禮、礼物は冬には雉を用いる。 [註] 士が礼物に雉を用いるのは、雉がかたく操を守って、交わるには時が有り、別に倫が有り、その死ぬのは、生きて服従すべきでないが為である、といったことを取るためである)

<儀禮・士相見禮>

③雉は淫蕩

雉鳴求其牡

<詩經・邶風・匏有苦葉>

(めすのきじが鳴いておすのけものをさがしておる。[いよいよおかしなことじゃ) [註] 鳥のめすが、けもののおすを求めているのは、はなはだしい淫乱のたとえ。(\*14)

④雉は悪符

穆帝升平五年八月己卯夜、天中裂、廣三四丈、有声如雷、野雉皆鳴。是後哀帝荒疾、海西失徳、皇太后臨朝、太宗総萬機、恒温専権、威振内外、陰氣盛、陽氣微。

(穆帝升平五年八月己卯夜、天中裂ける、廣さ三四丈、雷の如き音が有り、野雉皆鳴く。この後哀帝荒疾、海西に徳を失い、皇太后が朝政に臨み、太宗が天子の政務を総じて、恒温が権を専らにし、威を内外に振るい、陰気が盛んで、陽気は微である)

<晋書・天文中>

妲己＝雉鷄精説は③、④といったイメージから習合されたものと考えられる。また、九頭の雉、というのも九尾狐と同じく“九”は窮数であるということ、そして、

⑤九頭鳥は悪符。

又有鳥止於後園、其色赤、形似鴨而九頭。其年帝崩。

(また鳥有り、後園に止まる。その色赤、形は鴨に似て九頭。その年帝崩ず)

<隋書・五行下>

というような国乱の悪符といったイメージも内含されていたろう。

5-2 ; 雉鷄精妲己

以上のようなイメージが仮託されて妲己＝九頭雉鷄精説は生まれたと目される。だが、それでは論証に足りない。別にこのような条件を揃えた動物など珍しくもないではないか？

あいにくと、妲己が何故九頭雉鷄精になったのかを説明する証拠は今のところ見つからない。あるのは上述したような要素だけである。しかし文献、そして『封神演義』の記述から、前述した論文で章培恒が述べていたように、妲己＝雉鷄精説が確かに一定の広がりを見せていたと推測されるのである。

妲己＝雉鷄精説に触れている文献を次に挙げる。

古今事物考謂、商妲己狐精也。或曰雉精。猶未變足、以帛裹之。宮中效焉。其説近誕。似未可據。

(古今事物考に言う。商の妲己は狐精なり、と。或いは雉精と言う。変化するも、なお未だ足は変わらず、帛もってこれを包む。宮中これにならう。その説近くに誕ずる。未だ據すべからず)

<琅琊代醉編・卷十九・纏足>

妲己——元是妖雉亡国。

(妲己は元々妖雉であり国を亡ぼす)

<三教教源流搜神大全・太歳殷元帥>

『封神演義』には妲己の他、二人の妖怪が化けた寵妃が登場する。これは、

帝王世紀云…「紂自燔于宣室而死、二嬖妾与妲己亦自殺」則妲己之外、更有二人也。

(帝王世紀に言う…「紂自ら宣室に火を放ち死す。二嬖妾と妲己もまた自殺す」則ち妲己の外、更に二人有り)

<中国小説史料 (\*15) >

という説を補填するためのものだろう。前にも述べたが、一人は玉石琵琶精が化けた王貴人、もう一人が九頭雉鶏精が化けた胡喜媚である。

しかし、胡喜媚は九頭雉鶏精という正体を持ちながら、狐的な側面を備えている。

それは“胡喜媚”という名前そのものである。

“胡”という姓は、音が“狐”と通じることから、狐が人に化けた者の姓としてしばしば用いられる。(\*16) 数多ある姓の中からあえてそのような姓を雉鶏精に付けるのは不自然だ。なら、何故このような名にしたのか、私にはここには『平妖伝』の影響があると考えられる。

『平妖伝』には聖姑姑・胡黜・胡媚兒の三匹の妖狐が登場する。この胡媚兒はそれ自体として妲己を強く意識した存在である。

第十五回に胡媚兒が講釈を聞くシーンがある。

原來說的是紂王妲己的故事。說起來妲己是紂王聘來的一個美人。迎至中途、一陣狂風、天昏地暗、從人都驚倒了。風過處、掙扎起來看時、只有妲己端座不動。紂王道他有福分、立為正妃、十分寵幸。却不知那妲己已不是真的、是個多年玉面狐狸精、起這陣怪風、攝了美人開去、自己却

変做他的模様。百般妖媚、哄弄紂王。紂王只為寵了這個妃子、為長夜之飲、以酒為池、以肉為林。誅殺諫臣、肆行無道。其時萬民嗟怨、惹起周武王興師伐罪、破紂王於牧野、殺妲己於宮中。……

媚兒……心下想道…「同一般狐媚、他能攘妲己之位、取君王之寵。我之靈幻、豈不如他乎？」

(まず話したのは紂王と妲己の故事であった。妲己は紂王が聘来した美人であった、と話し出した。迎える途中で、一陣の狂風が吹き、天昏く地暗く、従者みな驚き倒れた。風が過ぎ、もがき立ち上がって見ると、妲己は端座して動かなかつた。紂王は彼女には福分が有る、と言って正妃に立て、十分寵幸した。ところが、妲己が既に本物ではなく、多年玉面狐狸精が、怪風が起きたときに、美人をさらい、自ら彼女に変化した、ということを知らなかつた。あらゆる妖媚で、紂王をだました。紂王ただ妃を可愛がるために、長夜の飲を為し、酒で池を造り、肉で林を為した。諫臣を誅殺し、無道をほしいままにした。その時萬民嗟怨し、周武王の罪人を伐つための軍を興すのを引き起こし、紂王を牧野に破り、妲己を宮中に殺した。……

媚兒……心に想つた…「同じ狐媚だというのに、彼女は妲己の位を奪い、君王の寵愛を受けた。私の靈幻の術が、どうして彼女に及ばないことが有ろうか？」)

同じ妖狐が妲己に変異して正妃の位を得、主君の寵愛を得たことに負けるものか、と発奮するのである。そして宮中に侵入して皇太子に近づこうとし、関聖（関羽）に殺される羽目となる。

このシーンなど胡媚兒が狐妖であつて初めて成立するシーンだが、元々『平妖伝』には狐は関与していなかつた。狐の姿が見えるのは馮夢龍が手を加えた四十回本からである。（\*17）だから当然、このシーンもそれ以前には存在しなかつた。その四十回本（天許齋本）の刊行は明・泰昌元年（1620）である。ただしこの版本は焼けてしまったので崇禎年間（1628-1644）に重刻本が発刊された。

このことが、『封神演義』の成立を考える上で意味を持ってくる。  
章培恒氏の説を要約して紹介しよう。（\*18）

四十回本『平妖伝』では両版とも、序文で当時流行した小説について論じているのだが、前者では『封神』に触れておらず、後者で初めて『封神』の名前が見える。

また、『封神演義』の原刊本は『新刻鍾伯敬先生批評封神演義』であるが、実際に鍾惺（鍾伯敬）が批評を付けたのではなく、当時高名だった彼に仮託したものなのでその出版は彼の死んだ天啓四年（1624）以降となる筈である。

この二点から、四十回本『平妖伝』が世に出た時点で『封神』が存在していなかったことは明らかである。

章培恒氏は、『封神』は、許仲琳が最初の少しの部分を書き、李雲翔が完成させた、という説を述べられている。ということは、二人目の作者たる李雲翔が四十回本『平妖伝』を目にする機会は十分にあった事になる。

彼は胡媚児のキャラクターに魅力を感じ、あと二人の寵妃の枠を埋めるのに流用した。ただし、その際に狐のままでは狐が二匹となり重複してしまうので、既に広まっていた妲己＝雉鶏精説を採用して、雉鶏精に設定を移したのである。だからその名前に前身である胡媚児の面影が残され、雉鶏精にしては不自然な名前になってしまったのであろう。

このことから、妲己＝雉鶏精説が往時において一定の広がりを見せていたと推測されるのである。

第陸章；【結】小説の成立～如何にして物語は創りゆかれるのか～

以上、一連のイメージ変遷の分析により、様々な要素の集合体としての妲己という姿が浮かび上がった。

歴史的事実からすれば妲己は殷・紂王の妃であり、傾国の美人。そして当然ながら人間である。しかし、『封神演義』などの小説中に現れるのは狐変の

妖婦としての妲己。はてには雉鷄精であるとまで言われる。

この全てが事実その各場面において存在した、という点で正しいのである。

妲己というひとりの人物。それはあるいはありふれたただの一悪妃だったかもしれない。それが、文・武王の徳を喧伝するために稀代の妖婦というレッテルを貼られ、なおかつ諸書に引用されることでますますそのイメージが一人歩きしていった。

一方、狐という動物も実際ただのけものであるものが、イメージの転変の中で妖怪、特に淫蕩とか、狡猾、蠱惑といった姿を獲得し、それを表現する「狐媚」「九尾狐」という言葉は抽象化されて、一般化された。

その両者が出会い、事実性という枷を越え、語り部の自由な想像力・創造力によって生まれたのが『封神演義』に描かれるような狐媚を為す、残虐な九尾狐妲己という姿であった。

妲己の転変を辿ることで見えてきたのは如何にしてイメージは変容していくかという一つの例であり、『封神演義』の成立までの道筋である。しかし、殷周革命や妲己を取り扱ったのは当然『武王伐紂平話』『列国史伝』『封神演義』に限られるものではない。『平妖伝』中で胡媚兒が聴いているように民間の講釈もあったし、演劇という形のそれもあった。これらについての考察を欠いては確かな妲己像を描き出すことは出来得ない。今後の検討が必要となろう。

## § 註

### 第零章

0高田衛監修、稲田篤信、田中直日編『鳥山石燕 画図百鬼夜行』国書刊行会

### 第壹章

- 1 “白狐王者仁智則至”（白狐は王者が仁であり、智であれば、至る）〈宋書・符瑞上〉
- 2 『武王伐紂平話』『列国史伝』において妲己の正体はそれぞれ“九尾金毛狐子”（『平話』巻上）・“九尾狐狸金毛粉面”（『史伝』巻一、蘇妲己馭堂被魅）と金色の九尾狐とされてい

る。このことから、金色ということが瑞祥から妖狐への転変において何らかの意味を為していると考えられるが、現時点ではその理由はわからない。

### 第弐章

3堀誠「狐変姐己考補」学術研究（国語・国文学篇）第三十九号 p127-135

4『漢語大詞典』「狐媚」。また「狐魅」にも“媚惑・以柔媚手段惑人”という意味がある。

5 “南山崔崔 雄狐綏綏” <齊風・南山>

（高く険しいあの南山、狡猾な狐が伴侶を探しに行く）

“有狐綏綏 在彼淇梁” <衛風・有狐>

[狐] 一説狐喻男性。[綏綏]《集伝》“独行求匹之貌”

（狐がうろうろと、淇の川の橋にいる。[狐] 一説に狐は男性の比喩。[綏綏]《集伝》独り行きてつれあいを求めるさま）

本文、注釈の引用は中国歴代名著全訳叢書『詩経全訳』貴州人民出版社、による。

### 6例え

“唐代州民有一女。其兄遠戍不在。母與女独居。忽見菩薩乘雲而至。謂母曰。汝家甚善。我欲居之。可速修理。尋当来也。……菩薩與女私通有娠。……有道士為作法。竊視菩薩。是一老狐。乃持刀入。砍殺之。

（唐の代州の民に一人の女があった。その兄は遠くに兵役に就いて家にいない。母と女だけが住んでいた。あるとき菩薩が雲に乗って現れ、母に言った。汝の家は甚だ善い。私はここにいたい。速やかに修理すべし。きっと尋ねて来るだろう。……菩薩は、女と私通し妊娠させた。……道士が作法をなし、のぞき見ると、菩薩は一匹の老狐だった。刀を持って飛び込み、斬り殺した）

<広異記>（『太平広記』卷四五〇・代州民）

7 「褒・姐」の二人は狐媚をなす女の中の最たる存在、……その身はあくまでも妖女であって「女妖」をなす狐の変身としてでないことは言を俟たない。狐の「女妖」と女の「狐媚」とは截然と画されているが、その「女妖」と「狐媚」そして「褒姐之色」を対比しての言説は狐変姐己説の発生を内在するようで、その胚胎産生をも予感させるものである。加えて、害毒甚大な女の容色媚態が「狐媚」の称をもって呼ばれたからには、それが「狐」字を帯びる以上、あながち姐己の如き狐変の妖婦の誕生を見るにいたっても不

思議ではあるまい」

(堀誠「狐変妲己考補」前掲\*3)

### 第参章

8田村和親「殷の紂王の酒池肉林説話の生成」二松学舎大学論集 p61-84 S55年度

また、酒池肉林説話の由来となったろう記述は『韓非子』『淮南子』に見られるが、  
「それらは前引の白川氏が述べるように(筆者註;白川静『甲骨文の世界』平凡社東洋文庫)、神事に於ける燕禮の盛大さを表徴する所から発せられるものとも考えられ、後述する『史記』『列女伝』に見られる男女を裸にして池邊で相い戯れさせたという、彼の説話は未だこれを認めることができない」(前掲田村論文)

### 第肆章

9小峯和明「大江匡房の狐媚記—漢文学と巷説のはざままで—」

中世文学研究第十一号 S60.8刊

10堀誠「狐変妲己考」学术研究(国語・国文学篇)第三十六号 p103-113

同論文によると、魯迅は妲己について『中国小説史略』第十八篇「明之神魔小説(下)」『封神伝』で、妲己を狐精とする説が唐の李瀚撰『蒙求』註に見えると指摘しているが、  
「現存する『蒙求』の注釈書である『附音増広古注蒙求』や宋の徐子光の集注本には、妲己自体に関する表題は備わず、収載される諸注の中にも当該するであろう条文を検出することは出来ない」

また、李暹注系の『纂図附音増広古注千字文』の「周發殷湯」の注の一説に“(妲己を斬ると)即変作九尾狐狸也”とあるが、

「今日に伝わる『千字文』注釈書最古のもので、纂図附音本の原本あるいは李暹注の古態を伝えていると見られる『注千字文』、いわゆる「上野本」……には、……もとより妲己に対して「変作九尾狐狸」といった記述はない。纂図附音本は李暹注の「古注」を称するものの、『経籍訪古志』にいうような「李唐以前之遺稿」とはにわかに断定できないであろう」、とある。

11 “赵景深……结论说：“《封神演义》从开头直到第三十回，除哪吒出世的第二、三、四回外，几乎完全根据《平话》来扩大改编。从第三十一回起，便放开手写去，完全弃掉《平话》，专写神怪的部分了。……”……从《武王伐纣平话》到《封神演义》之间还有一个中

間环节，这就是余邵鱼的《列国志传》。……其卷一记述文王入商、羌尚发迹及武王伐纣情节、系由《武王伐纣平话》改编。”

（趙景深は結論づけて言った：「《封神演義》の初めから第三十回までは、哪吒が生まれる第二，三，四回の他は大体完全に『平話』に基づいて拡大、改変している。三十一回からは思い切って、完全に『平話』を捨て去って、専ら神怪的な部分を書いた…」…『武王伐纣平話』から『封神演義』の間には更にもうワンステップ有って、これが余邵魚の『列国史伝』である。……その、卷一は文王が商に入り、羌尚が立身出世し、武王が紂を伐つ物語を記し、『武王伐纣平話』を改編したものである）

（石昌渝『中国小説源流論』「二 从《武王伐纣平话》、《列国志传》到《封神演义》」

p305-312 三聯書店 1995）

もちろん、『列国史伝』と『封神演義』も直接に関係がある。例えば、『封神』はしばしば『史伝』の詩を盗用していたりする。

三者の関係は、二階堂義弘『封神演義の世界』大修館書店 1998、を参照。

## 第五章

12王貴人の正体が玉石琵琶精という発想は、“帝紂……於是使師涓作新淫声、北里之舞、靡靡之楽”（帝紂……ここにおいて師涓に新たな淫声、北里之舞、靡靡之楽を作らせた）（『史記』「殷本紀」）というような、紂が淫声・音楽を好んだという記述から由来したのではないかと思われる。

13章培恒「新整理本封神演義・前言」江蘇古籍出版社『新整理本封神演義』p1-13

14吉川幸次郎註『詩経国風 上』岩波書店 中国詩人選集 1958

15孔総境編輯『中国小説史料』上海古籍出版社 1992

16 “聖姑姑生下一牡一牝、牡的叫做胡黠兒、牝的叫做胡媚兒。……這胡字是他的総姓”

（聖姑姑は牡と牝を一匹ずつ生んだ。牡は胡黠兒と言ひ、牝は胡媚兒と言う。……この

‘胡’の字は彼（筆者註；狐）の総姓である） <四十回本『平妖伝』第三回>

「“這胡字是他的総姓”は、「狐」の音が「胡」に通ずることによって付会された一般的な狐姓とってよい」

（堀誠「『平妖伝』四十回本における妖狐の形象」中国文学研究 第十一期 1985.12）

17「新本（※筆者註；馮夢龍が手を加えて成立した四十回本のこと）がこの三人の前身を

## 妲己と狐 (中塚)

狐であるとしたことは、これらの者に筆誅を加えるという意図があったのであろう。そして、中でも特に胡永児（※筆者註；胡媚児が転生した後身）を悪者とした。このことは胡永児を殷の紂王を惑わして暴虐の限りをつくさせた妲己に比していることでもわかるが、おそらくこれは明の永楽十八年（一四二〇）に反乱を起こした妖婦、唐賽児のことが影響しているのであろう」（太田辰夫『平妖伝』解説 平凡社古典文学大系 1967）  
また、『平妖伝』における妖狐像の形成については、堀誠「『平妖伝』四十回本における妖狐の形象」前掲(\*16)、がある。

同論文では、

「胡媚児は……古の妲己と張り合おうとするうら若き牝狐なのである。その妖麗さについては、名だたる唐の張昌宗の性別を変えた転生として理由づけられ、かつ『武王伐紂平話』や『封神演義』に見るが如き妲己の像が投影される。つまり、胡媚児は、妲己、張昌宗という古人の面容を貸借して、狐身としての美貌の容姿が形成されていたのである」

と述べ、また、聖姑姑の幻術を破る照妖鏡のアイデアを、九尾金色狐を殺すのに降妖鏡を用いる『平話』の筋立てにヒントを受けた可能性を示唆するなど、『平妖伝』の成立に一連の妲己・殷周革命の物語が影響しているという考えを示している。

18章培恒 前掲文